

2012 年度事業報告書

たらちねの事業内容については、開所年度からの放射能測定事業のほかに、子どもの保養や地域の母親たちのサポートを行うなどの変化があった。それは、原発事故による放射能被害の大きさが明かされていく過程で、食や身体の健康だけでなく、子どもの心のケアも必要だという認識が芽生えていったからである。また、たらちねの基本的な活動である放射能測定事業では、測定値の分析をできるだけ詳細に丁寧に行った。子どもや孫に食べさせるために、限りなく0ベクレルに近い食材を求める利用者が多いので、小さな測定値まで分析し、数字だけではわからない場合はスペクトルを参考に丁寧な説明を心がけた。

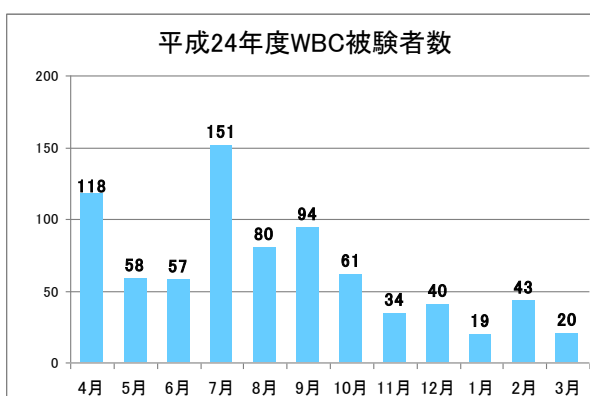
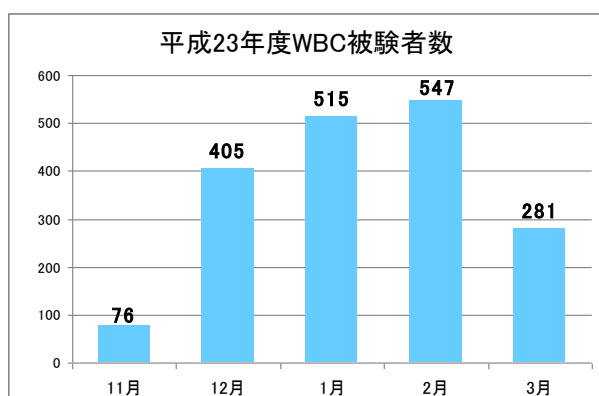
結果として、一定の測定値以下は一律に「不検出」とする公的機関の測定との差別化につながった。「たらちね」の測定は、「子どもたちに安全なものを」という母親たちの心から始まったものであり、その目的は今も継続されている。「子どもたちには0ベクレルのものを…」というのが「たらちね基準」である。

1. 全身放射能測定

24年度は、開所時の23年度にくらべると利用者が少なくなっている。放射能被害の緊急的な心の不安が小さくなっているということが考えられる。定期的に測定に訪れる人の傾向としては、砂ぼこりの立つ場所で作業をする農業従事者や除染作業を行う人が目立った。また、企業による団体測定が増えた。測定値の傾向としては、除染作業を日常的におこなう人からは、セシウムが検出されることが多く、また、山菜など高線量食材を気にせず食べている人からも高い値のセシウムが検出される。そういった家庭の子どもからもセシウムが検出される。呼吸による吸引や食べ物からの内部被曝の危険を感じる結果となっている。

平成 23 年度 1824 名

平成 24 年度 775 名



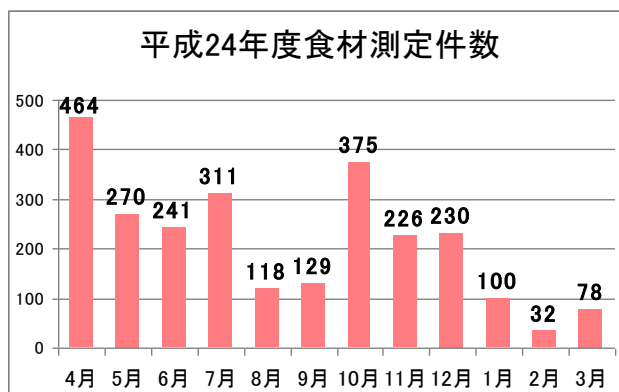
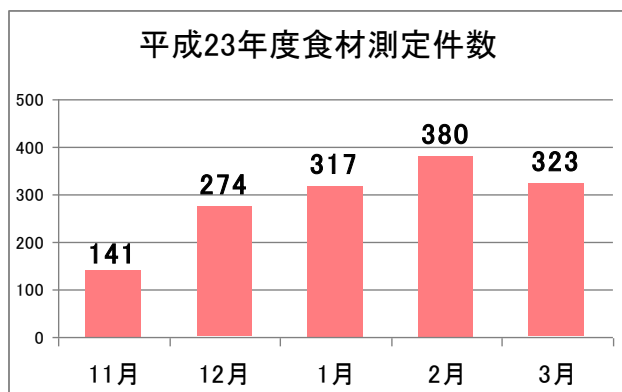
2. 食材放射能測定

原発事故から2年が過ぎようとしていることで、人々の関心は「環境の中の放射能値がどのくらい落ちたか？」に集中した。前年度の測定値と比較をしながら測りにくる利用者が多かったように思う。測定の結果として、線量が下がっている食材もあれば上がっているものもあり、汚染が雨や風などの自然の力により移動することや、セ

シウムの線量は2年では下がらないことも明らかになった。また、公的機関の測定結果では十分でないとする利用者も多かった。「不検出」という結果に不安を感じ、同じ食材を持って測定に訪れる利用者が多くあった。地域の人々が、子どもや孫の健康管理に測定を役立てようと努力していることがわかった。

平成 23 年度 1435 件

平成 24 年度 2574 件



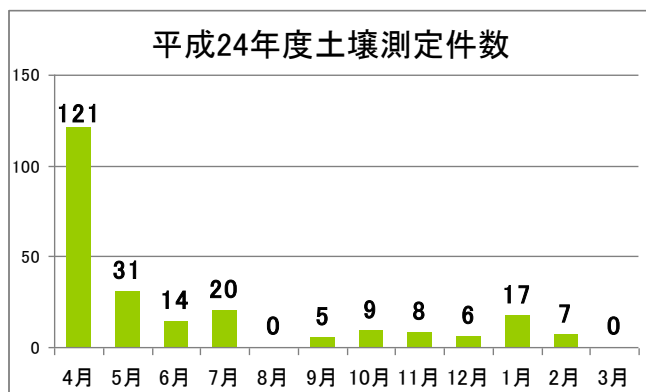
3. 土壌放射能測定

・農地・菜園の土壌測定

食材同様、土壌の測定についても前年との比較を行う利用者が多かった。土の入れ替えなど除染を行った場所の測定値は低くなるが、行わないところは、それほど変化はなかった。セシウムが土の中に浸み込んで、汚染層の深さが深くなる程度の変化にとどまった。また、前年より汚染の度合いが進んでいる場所もあり、風や雨などで汚染が移動することも考えられる結果となった。作付けの前に畑の土壌の測定を行う利用者が多く、それぞれの人々の努力する姿が印象に残った。また、子どもの遊ぶ砂場の土の汚染を気にする母親の姿もあった。

平成 23 年度(3月のみ) 47 件

平成 24 年度 238 件



・除染作物栽培

ソルガムというイネ科モロコシ属の植物を畑で栽培し、その植物に土中のセシウムを吸収させ除染を行うという試み実行した。川前・末続のホットスポット地域や比較的線量の低い住宅街の家庭菜園など、様々な場所に協力を仰いだ。作付け前と収穫後のそれぞれの時期に土壌測定を行ったが、測定の結果は、除染という効果が表れるような測定値にはいたらず、ほとんど変化がないという状態だった。

4. 甲状腺検診プロジェクト

3月16日・17日に甲状腺検診事業のオープニング式を行った。24年7月から子ども保養プロジェクト(沖縄・球美の里)で行ってきた検診事業の継続である。今後は、「たらちね」を中心に、有志の医師のみなさんの協力を得、継続的にやっていく。

甲状腺検診プロジェクト顧問のみなさん(敬称略)

野宗義博(島根大学 甲状腺外科系教授)・西尾正道(北海道ガンセンター名誉院長)・木村真三(獨協医科大学 放射線衛生学准教授)・黒部信一(小児科医 未来の福島子ども基金代表)・広河隆一(フォトジャーナリスト 沖縄・球美の里理事長)

5. 自主環境測定

・地域線量と環境放射能

居住地域の空間放射能測定は日々の測定事業の合間に行った。砂浜の土壌測定とともに今もデータを集めている。環境の中にある原発由来の放射能がどの程度の健康被害をもたらすものなのか？まだ、わからないことのほうが多いが、子どもが自由に走り回れる場所は確実に制限されていることは確かである。

・事故被害の全体像へ

ガンマ線の測定だけでなく、人体の健康と自然環境に大きな影響を及ぼすアルファ線・ベータ線の測定を行う計画であったが、測定器を購入する資金の準備ができなかった。したがって、計画していた事業を行うことができなかった。しかし、私たち市民団体が測定を行わなくても、公的機関で行うことは必要なことであると考え。ゲルマニウム半導体ではガンマ線のみ測定であり、アルファ線・ベータ線の汚染の状況を知ることはできず、人々の心配はつるばかりである。

6. 母親ボランティア測定

子どもの遊び場の測定や、弁当のおかずの市販品の測定など、母親のみなさんと協力し放射能測定を実行した。件数が十分にそろっていないので、この事業は25年度に引き継ぐ形となり、今後とも継続していきたい。

7. 設備の充実(事業付帯事項)

測定室内の水道設備の取り付けを計画していたが、資金面の問題で実行にいたらなかった。

8. 「沖縄・球美の里」プロジェクト・いわき事務局

原発事故による初期被曝と汚染地域で生活することによる被曝という問題を抱えた子どもたちのための保養プロジェクトである。福島県および近隣地区の子どもたちの保養希望者の受け入れと送り出しがいわき事務局の役割である。平成24年7月5日に第1次保養のグループを沖縄県・久米島の「沖縄・球美の里」への保養に送り出すことができた。平成25年の春休みの保養までで約500名の母子を保養に送り出し、回数としては1次保養から10次保養までの10回の保養事業を行った。本部は東京にあり、放射能測定器や甲状腺検診事業の支援者でもある広河隆一氏が理事長を務めるNPO法人「沖縄・球美の里」の「いわき事務局」として事業に参加している。今後も継続していく。

9. そのほかの事業

・専門家による講演会

7月14日 今中哲二講演会 生涯学習プラザ大会議室 130名参加

10月8日 木村守和 医療座談会 カネマンビル3F ホール 20名参加

11月24日 木村真三講演会 いわき市文化センター大講義室 140名参加

12月17日 マクシンスキー講演会 いわき芸術交流館アリオス 大リハーサル室 100名参加

2月24日 西尾正道講演会 生涯学習プラザ大会議室 120名参加

・放射線防護のための活動(キッズヨガ・調理教室など)

4月22日 キッズヨガ 講師 高橋佐知子 錦公民館 20名参加

6月17日 キッズヨガ 講師 高橋佐知子 カネマンビル2F マリンホール 10名参加

9月2日 キッズヨガ 講師 高橋佐知子 常磐共同ガス 会議室 20名参加

・ママカフェ 協力<ゆの実>会 常磐共同ガス キッチンスタジオ 30名参加

12月8日 ママカフェ 協力<ゆの実>会 常磐公民館 調理室 30名参加